

# れきしみち

- 企画展「安城の文化財—モノ語り名品展Ⅳ—」
- 松平シンポジウム (2月開催)
- 古文書から分かる村のくらし
- 安祥文化のさとではたらく人たち、イベント紹介
- 昭和の名作シネマ、市民ギャラリーよりお知らせ

2017.4  
No.104



## 特集：安城の文化財—モノ語り名品展Ⅳ—

写真中央：福釜松平二代親次画像（部分・宝泉院所蔵）



毎月  
第4日曜日は

## 昭和の名作シネマ

月に一度、名作映画を御覧下さい。

**場所** 講座室 **定員** 80名 **時間** 10:00～ **当日参加可能**



懐かしの名作が  
スクリーンで  
見られるぞ

上映スケジュール

4/23  
日

1963年 **いつでも夢を**

**出演** 吉永小百合、橋幸夫 **時間** 89分

下町の工場地帯、吉永小百合演じる看護婦のひかるは工具たちの人気者。若者たちが幸せを求め、恋や友情に支えられながら生きていく姿をさわやかに描く。

5/28  
日

1963年 **青い山脈**

**出演** 吉永小百合、高橋英樹、浜田光夫 **時間** 100分

吉永小百合の新人、浜田光夫の六助、高橋英樹のガンさんら、日活青春オールスターで青春の限らない夢と希望を描く石坂洋次郎原作の映画化。

6/25  
日

1960年 **霧笛が俺を呼んでいる**

**出演** 赤木圭一郎、芦川いづみ **時間** 80分

哀愁たっぷりの霧の波止場に華麗なアクションとミステリー！永遠のスター、トニーに乾杯。

7/23  
日

1956年 **太陽の季節**

**出演** 石原裕次郎、長門裕之、南田洋子 **時間** 89分

石原慎太郎の小説を、長門裕之と南田洋子の共演で映画化。「俺はやりたいことをやる！」日本中に一大センセーションを巻き起こした「太陽族」の生態を描く。スーパースター裕次郎の鮮烈デビュー作。

8/27  
日

1956年 **ビルマの豎琴総集編**

**出演** 三國連太郎、安井晶二 **時間** 63分

安井晶二演じる水島を待つ小隊と、僧侶となりビルマに残る決意をする水島のドラマを、さまざまなエピソードと音楽で綴って行く。戦争と平和。普遍的なテーマを、音楽という普遍的な題材を使って真摯な姿勢で描く。

9/24  
日

1963年 **夜霧のブルース**

**出演** 石原裕次郎、浅丘ルリ子 **時間** 104分

横浜港で船荷役を牛耳るボス・山茶花究の前に、現れた一人の男・裕次郎。復讐に燃える男が、ボスを前に語り出したのは、神戸でやくざをしていた時代の話だった。

安城市民ギャラリーよりお知らせ

穏やかなまなざし 杉浦桂子・日本画の魅力



杉浦桂子「ゆりかごの詩」

柔らかな色彩表現で母子像を多く描く、安城ゆかりの日本画家、杉浦桂子。88歳を迎えたこれまでの日本画の足跡を一堂に紹介します。観覧無料。

**開催期間** 平成29年6月23日(金)～7月8日(土)  
**時間** 9:00～17:00  
**休館日** 6月26日(月)・7月3日(月)  
**会場** 市民ギャラリー展示室D・E

## 安祥文化のさと

安祥文化のさととは安城市にある松平氏四代50年の居城跡を整備した安祥城址公園一帯の名称です

[全館共通事項]

**住所** 〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀30番地  
**休館日** / 毎週月曜日 (祝日の場合は開館)、年末年始 (12/28-1/4)  
**URL** / <http://ansyobunka.jp/> 安城市歴史博物館

**安城市歴史博物館**  
開館時間 / AM9:00～PM5:00  
TEL: 0566-77-6655 FAX: 0566-77-6600

**安城市民ギャラリー**  
開館時間 / AM9:00～PM5:00  
TEL: 0566-77-6853 FAX: 0566-77-4491

**安城市埋蔵文化財センター**  
開館時間 / AM9:00～PM5:00  
TEL: 0566-77-4490 FAX: 0566-77-4491

**安祥公民館**  
開館時間 / AM9:00～PM9:00  
TEL: 0566-77-5070 FAX: 0566-77-6062



# モノ語り 名品展Ⅳ

【観覧料】  
無料  
平成29年  
4/8(土)~7/2(日)

安城市内には、歴史や文化を知る上で重要な国・県・市の指定文化財が二二二件(平成二九年三月現在)あります。安城市歴史博物館では、これらを順次紹介する目的で、「安城の文化財―モノ語り名品展―」と題する展覧会を、五回シリーズで企画しました。平成二五年からこれまで三回開催し、今回はそれに続く四回目にあたります。

文責：天野信治



阿彌陀如来立像(本證寺蔵)

## 第1話



方便法身尊像(願力寺蔵)

『無量寿経』などの經典で、西の方角のはるかかなたにある極楽浄土に住み、現在も教えを説いているとされているのが阿彌陀如来です。「なむあみだぶつ」と名前をとえば極楽浄土に生まれかわることができると説明され、日本では広く信仰されました。

## 「なむあみだぶつ」―阿彌陀信仰―

安城市内にも数多くの彫刻や絵画の阿彌陀如来像が残されています。特に戦国時代に本願寺から与えられた方便法身尊像と呼ばれる画像是市内に類例が多数あります。また、名号本尊(阿彌陀仏の名前を書いた掛軸)が多いのも浄土真宗が盛んなこの地域の特徴です。

## 第2話

### お坊さんの姿

浄土宗を開いた法然の業績を語ることは、弟子である親鸞やその後に続く真宗門徒にとっても、教えが正しいものであることを知る重要な機会になりました。本證寺の法然上人絵伝は、そうした目的でつくられた優品です。

宗派を開いた有名なお坊さん以外に、そのお寺の発展に重要な役割をはたしたお坊さんの木像を堂内にもつる場合があります。本證寺の慶円上人像や円光寺の順正上人像はこれにあたります。そのお寺の重要な歴史の「コマ」を象徴するような存在です。



慶円上人坐像(本證寺蔵)

### 合戦の手柄をほめる

戦功などをたたえてあたえられるのが感状です。これは今川義元が足立右馬助にあたえたもので、永禄元年(一五五八)の寺部城合戦で討ち死にした右馬助の弟について、生前の活躍を取り上げています。寺部城合戦は松平元康(後の徳川家康)の初陣として知られ、この文書の日付により、その直前に合戦の勝敗が決していたこととなります。



今川義元感状(個人蔵)

# 地元「安城」の生い立ちをひもとく

## 10のモノ語り

### 第5話

#### 神社に集められた文書



祭礼帳(桜井神社蔵)

桜井神社に残された江戸時代の古文書は、田畑の広さや作物のとれる量を記した検地帳、年貢の免除を願った書類などさまざまなものがあります。これらは本来は村で保管されていた文書と思われるものです。このように、村の重要な文書を神社に集めて保管していたため、今日まで伝えられてきました。また祭礼の記録は、村の若者組の書類でした。中心になる馬祭り(飾り馬の奉納)のほか、夜灯(辻行灯)や神楽舞、相撲、花火、獅子舞、棒の手などが行われていた様子がわかります。

### 第6話

#### 木札に書かれた古代の文字

紙がまだとても貴重なものであった頃、日本では大陸にならって、木札に文字を書いていました。この木札が「木簡」と呼ばれるもので、遺跡の発掘調査で土中から見つけることがあります。三河地方での発見例は平成二二年(二〇〇〇)に安城市小川町の下懸遺跡で見された奈良〜平安時代ものが最初です。市内ではその後も木簡の出土が続いてきました。これまでに四点が確認されています。中には地名や人名が判明するものもあり、西三河の古代を考える上で大変貴重な史料です。

### 第9話

#### わかしたお湯の力

里町の不乗森神社で毎年三月九日に行われているのが「湯立神事」です。大きな釜に米や塩などを入れてわかした湯を神様に供えし、参詣した人々が釜でぬらした御幣でお湯を体につけたり、このお湯を飲んで健康を願います。伝説では、平安時代から続く古い行事で、戦国時代に中断した後、江戸時代に現在に近い形で復活したといわれています。以前用いられていた鉄釜には宝暦六年(一七五七)の銘があり、二五〇年ちかく使われたものであることがわかります。

### 第10話

#### 建物がならぶお寺

お寺の境内には、中心になる本堂のほかに、山門や鐘楼、庫裏(僧侶が生活する建物)などが建てられる場合があります。近年行われた市内の建造物調査では、現在でも江戸時代の建物が、そろって残る例が確認されました。

### 第7話

#### もののふの館

戦国時代に築かれた武士の館は、多くの場合、堀や土塁で囲まれています。現在市内で「〇〇城址」と呼ばれているものの大半は、館の周りを方形に囲むだけの単純な構造のもので、発掘調査では後世に埋められた堀が姿をみせることもあります。中には安城城(安祥城)や桜井城などのように、土地の高低差を利用して、複雑な構造につくられたやや規模の大きい城址もいくつかあります。これらは、江戸時代に描かれた絵図などをもとにすると、曲輪(堀や土塁で囲まれた部分)が複数つながる様子を想像することができます。



法然上人絵伝部分(本證寺蔵)



「安城の社寺建築をめぐる」  
[日時] 6月3日(土)  
10時~15時  
[ガイド] 岩田敏也氏(安城市文化財保護委員会副委員長)  
[定員] 18名  
[料金] 1000円(昼食代込)  
[申込] 5月20日(土)9時より  
お電話でお申し込み下さい。



●体験講座  
「安城の巨樹名木をめぐる」  
[日時] 4月30日(日)  
10時~15時  
[ガイド] 福田英夫氏(安城市博物館協議会副会長)  
[定員] 18名  
[料金] 1000円(昼食代込)  
[申込] 4月20日(木)9時より  
お電話でお申し込み下さい。



企画展関連行事  
●記念講演会  
「安城の寺院建築」  
[日時] 4月16日(日)14時~  
[講師] 岩田敏也氏(安城市文化財保護委員会副委員長)  
[定員] 80名  
「法然上人絵伝」  
[日時] 5月20日(土)14時~  
[講師] 米倉迪夫氏(東京文化財研究所名誉研究員)  
[定員] 80名  
●歴史講座  
「西蓮寺の光明本尊をみる」  
[日時] 6月18日(日)14時~  
[講師] 天野信治(本館学芸員)  
[定員] 80名

体験講座申込先  
0566・77・6655  
(安城市歴史博物館)  
※記念講演会、歴史講座は申込不要です。



はつらつ

平成二十九年二月十九日安城市歴史博物館において第七回松平シンポジウムを開催しました。

タイトルの「信長衆ハ加勢当手コソ本陣ナレ」は「松平記」にある記述です。長篠・設楽が原の戦いで諸軍の備えができ、合戦が始まる直前、大久保忠佐が兄の大久保忠世の所に来て、「信長軍は援軍であり、徳川軍こそ戦いの主人公である本陣だ。信長軍に戦いを始められては恥である（現代語訳）」という言葉の部分です。このタイトルの意味は、今川氏滅亡後、武田との攻防は徳川が主として行っていたことを主張しています。一般に武田との戦いは織田と徳川において論じられていますが、長篠・設楽が原の戦いを徳川領国からみて考えたらどうであったかを問うシンポジウムです。対象時期は駿河の今川氏真の籠もる遠江掛川城を開城し、徳川家康が遠江を支配下に置いた永禄十二年（一五六九）五月から、武田氏が滅亡する天正十年（一五八二）三月までの三年の間、家康と武田氏が直接国境を接して攻防を繰り返した武田氏が滅亡するまでとしました。



播磨良紀氏  
中京大学教授

のもどで行われた。遠江では現在の掛川市辺りまで家康勢力が広がっていき、東部を舞台に対陣が続いていく。

このよつな中で天正六年に越後の上杉家で御館の乱が起こり、上杉景勝が北条氏から来た養子景虎と争い勝利する。武田は両者の仲介をしていたが、後に景勝を支持したため、北条と対立、甲相同盟が決裂した。北条氏が翌天正七年には織田・徳川に接近したため、武田氏は東西に敵を抱えることになった。

徳川領国では、松平信康事件が起こる。天正七年六月、信康とその妻で信長の娘の五徳との仲を直すため家康が岡崎までやってくる。しかし八月には親子で言い争い、その後岡崎から信康は退去させられ、ついには九月十五日には切腹となった。八月三十日には築山殿も殺される事件が起こった。おそらく岡崎の信康や築山殿と武田との接触が考えられ、徳川内部で起きていた武田外交路線の分裂によるものである。

その間、織田・徳川と北条との間で同盟が成立した。武田は天正七年末あたりから信長との講和、「甲江和与」に動いていた。天正八年三月には北条氏は信長に従属している。つまり、徳川・武田の戦争は、東海地方だけでなく関東や、さらに南奥州の動向にまで影響を及ぼしていた。

天正八年三月、家康は武田方の高天神城に総攻撃を開始する。城はなかなか落ちず、翌天正九年正月に城に籠もる岡部元信から助命の嘆願が出されるが、信長の指示により赦さず攻撃が続行され、三月二十二日、高天神城は落城した。これにより武田の勢力圏は遠江にほとんど無くなった。さらに救援できなかった勝頼の世間の評価を失墜させた。

家康は遠江を制圧し、東海地方に新たに君臨する存在として「三河守」を名乗り、奉者的朱印状を発給し始めている。対して武田は力を失い、天正十年に入ると信濃の木曾氏や駿河の穴山氏



村岡報告

村岡幹生氏  
中京大学教授

「武田の三河侵攻と徳川」要旨

今まで元龜二年（一五七一）と比定されていた武田信玄の足助城攻略を示す史料群は、鴨川達夫氏や柴裕之氏の研究成果により、長篠・設楽が原の戦い直前の天正三年（一五七五）とされる。この年四月十五日、武田勢の山県昌景が率いる先遣隊が足助城を攻め、さらに足助近辺の小城も落とす。山県からの書状には足助筋を確保し、隙となったので東三河の野田（新城市）の菅沼新八郎を攻め、そして南下して二連木（豊橋市）も落とすとしている。しかしこの書状は山県が取り繕って書いたもので、実は岡崎城乗っ取り作戦を前提としたものであったと考えられる。

江戸時代中期の三河の記録書「岡崎東泉記」によると、当時家康の正妻築山殿は息子信康が居る岡崎に住んでいた。そこに甲斐から来た巫女が接近、武田勝頼の企てを聞く。また岡崎の町奉行大岡弥四郎が武田と内通して岡崎城に武田を引き入れる作戦を考えていた。しかしそれが途中で露頭し処罰された。岡崎では、内通がばれていないように声聞師などを使って偽情報を流し、岡崎に向かってくる武田軍を本多忠勝らが先手として追い落としたとある。

この記述と符合するのが豊田市霧山に伝わる「嶋邑家根元慶図記」で、そこには、武田勢が信濃から三河の武節城、伊勢神峠を通り、明川（上）に継承するためのことであった。

信康事件によって、一門として扱われていた家康は微妙な立場になった。本能寺の変後から小牧・長久手の戦いまでの間の行動は、家康の自己の立場を以前に取り戻そうとしたものと思われる。また、信康と五徳の二人の娘は家康のもとにいたが、天正十八年に家康の家臣に嫁がせている。これは織田家との関係の切り札として最後まで残していたものと考えられる。

シンポジウム

三者の報告後に討論を行いました。論点として、一つ目は長篠・設楽が原の戦い以前の徳川・武田の関係。二つ目は信康事件での徳川内部あるいは織田氏との関係。三つ目は信康事件以後の徳川・武田関係についてそれぞれのパネラーからコメント・補足説明がされました。一つについて、村岡氏は、信康の初陣が天正元年に足助筋で果たされた。この時敵味方として武田との接点があったのでは、とされました。また、天正三年の岡崎攻めの失敗から、岡崎にはそれなりの防備体制があったと考えてよい、家康の浜松移動後の岡崎の支配体制について今後の課題であろうとしました。柴氏は天正三年の武田先遣隊の足助筋から東三河への移動は家康方で唯一残っている長篠城を落とす、奥三河を安泰にする目的もあったと考えてよいのではないかとしました。山本氏は東濃の岩村城を戦略上のポイントとしておさえる必要があるとされました。二について、村岡氏は、岡崎に潜り混んで



柴報告

柴裕之氏  
東洋大学講師

「長篠合戦後の徳川・武田両氏の動向—織田・武田両勢力の狭間で—」要旨

天正三年五月の長篠・設楽が原の戦いの大きな意味は、武田と家康の境目の問題が解決していくことにある。

家康による東三河、奥三河攻略は信長の協力

る者達の補足説明をされ、さらに長期化した戦線の中で徳川内部には厭世気分があり、その不満を築山殿は聞いてくれる立場だったのでは、としました。

山本氏は天正三年時の今川氏真（宗閻）の遠江牧野城からの退却は、築山殿も今川氏に繋がる人物であり関係性を推測されるのではとしました。

三について、山本氏は、今回のテーマである徳川・武田の攻防一三年は、徳川が織田権力への従属度を高めている時期といえる。高天神城への総攻撃当りを画期、転換点として直接織田対武田の戦いの中に徳川が位置づけられていく形に変化したのではないかとしました。

柴氏は、織田への従属化はすでに長篠・設楽が原の戦いの頃からあり、信康事件に繋がるとしました。さらに、信玄の時代に和解の仲介を依頼された織田が顔に泥を塗られるような裏切りを受け、名譽を傷つけられた織田は武田に対して許しがたい思いがあり、そのため甲江和与の考えは全くなかったという見解が研究者間にあると提示された。それ以外にも甲江和与の非現実性についての意見が出された。

最後に会場の平野明夫氏（国学院大学講師）は、この一三年を考える上で徳川の織田への従属度の深化の話は重要とした。また、信康と五徳の不仲を家康・信長が仲直りをさせようとしていたという点から、信康事件は信康本人が張本人ではなく、岡崎城内に住んでいない築山殿が怪しく、伝承でも築山殿の動きの中に著されていることを指摘しました。

最後に、コーディネーターの播磨氏から、当該時期の徳川・武田・織田の三者の関係が明らかになったと締めくくりました。来年も開催する予定です。ご期待ください。



山本報告

山本浩樹氏  
龍谷大学教授

「織田にとつての徳川と武田の戦い」要旨

元龜三年の三方が原の戦いや天正三年の長篠・設楽が原の戦いは、織田信長の後ろ盾なしには強敵武田と対峙するのは困難であった。家康と信長の関係は当初対等とは言えないが同盟関係にあり、はつきりとした主従関係はなかったが、徐々に従属度が増し、最終的に天正十年武田氏滅亡の際に駿河一國を与えられたことで臣従したと考えられる。

織田・徳川の関係は信康と五徳の婚姻によって一門に位置づけられていた。この関係の危機は信康事件と天正三年十二月の家康の伯父水野信元の殺害の二度あった。両者とも武田に絡む事件であった。

信康事件の起きた頃は信長にとつても西国の毛利を軸とした敵対関係があり苦しい時期であった。その中で、北条氏が信長に接近しはじめ、また武田からは甲江和与の講和を持ちかけられた。信康事件後の五か月後に五徳は岐阜に戻ってきた。信長はその時講和交渉を進めていた毛利氏の一門吉川元春の息子と再婚させる目的があったと推測される。織田統一後の次なる平定は武田に絞っていたと思われる。

高天神城の戦いで、高天神城内の岡部から矢文で助命を依頼されたが、これには勝頼の甲江和与へのメッセージがあったと解釈できる。信長は家康に対し容赦なく高天神城を攻め、また遠江平

第4回 /  
古文書から分かる  
村の暮らし

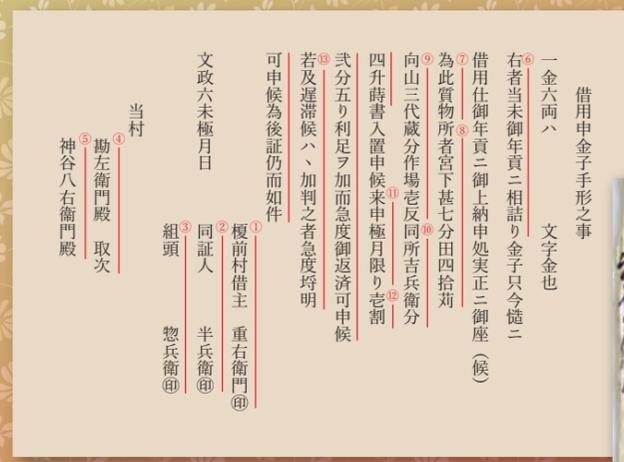
村人の借金  
— 昔の借入金 —

文責：館長 高山 忠士



↑借入金手形之事

これまで、村の事件簿や住民異動にかかわる古文書の紹介をしてきましたが、今回はちょっと視点を変えて、借金にかかわる文書を紹介します。いわば借金証文といったぐいなのですが、なぜそんなものが村の文書として残されているのかが問題です。



↑翻刻

まずは写真をごらんください。表題は「借入金手形之事」と書かれています。二行目に書かれた借金額は金六両です。その下の「文字金」は「ブンジキン」と読みます。同じ一両でも鑄造された時代によって金の含有量が違いますから、わざわざそれが分かるように指定してあるのです。ちなみに、文字金というのは「文」という字が極印された金貨で、元文金と文政金とがあります。この場合は元文金が改鑄された文政期の金貨だと思われます。

お金を借りたのは①榎前村の重右衛門さんです。②証人半兵衛さんと、③組頭惣兵衛さんは連帯保証人といったところで、取り次いだのは同じ榎前村の勘左衛門さんで、お金を貸したのは⑤神谷八右衛門さんです。神谷八右衛門さんというのはこの時期の他の村文書でも時々出てくる名前ですが、和泉村の人です。さて、おもしろいのは何のためにお金を借りたかが分かることです。⑥右者当未御年貢(二相詰り)、つまり今年の年貢(を納める)に困って借りたということです。

さらに、⑦この質物担保として、三ヶ所の土地とその主、及び広さが書かれています。まず、お金を借りたのは①榎前村の重右衛門さんです。②証人半兵衛さんと、③組頭惣兵衛さんは連帯保証人といったところで、取り次いだのは同じ榎前村の勘左衛門さんで、お金を貸したのは⑤神谷八右衛門さんです。神谷八右衛門さんというのはこの時期の他の村文書でも時々出てくる名前ですが、和泉村の人です。さて、おもしろいのは何のためにお金を借りたかが分かることです。⑥右者当未御年貢(二相詰り)、つまり今年の年貢(を納める)に困って借りたということです。

安祥文化のさとで  
はたらく  
人たち  
安城市歴史博物館  
「博物館受付」



Q1 受付の仕事って？

観覧券の販売や音声ガイドの貸し出し、図録やグッズの販売が主な仕事です。館内の案内から周辺の道案内など、お客様の様々なお問い合わせにも対応します。また安祥文化のさと会員の方への郵送サービスの発送なども行っています。お気軽にお声掛け下さい。



Q2 安祥文化のさと会員とは？

会員になると、展覧会のチラシや博物館情報誌「れきしみち」などが定期配送されます。常設展が会員価格で観覧できるほか、順次サービスも拡大予定です。29年度の申し込みを受け付けていますので、お気軽にお問い合わせください。年会費は500円です。(平成29年4月1日～30年3月31日有効)

Q3 おすすめの商品はありますか？

最近ではミュージアムショップがリニューアルし、扱うグッズも増えてきました。本多正信、加藤嘉明などの家紋コースター(各800円)はここでしか買えないオリジナル商品です。木を細かく切り抜いて作られたこだわりの商品なので、是非手に取って見てみてください。



「ガチャガチャ」も人気です！

安城市歴史博物館の4月～6月のイベント

歴博演芸場 体験講座

～醍醐の桜～

〔内容〕春の風とともにやさしく響く音色と、時代を駆け抜けた先人達を思って奏でる勇壮な曲を披露します。  
〔開催日〕4月9日(日)14:00～  
〔場所〕安祥城址公園  
〔出演〕NEO Japanesque (和洋楽器混成ユニット)



蓮如上人絵伝の絵解き

〔内容〕琵琶の演奏を交えた絵解きの実演を行います。  
〔開催日〕5月14日(日)14:00～15:00  
〔場所〕エントランスホール  
〔出演〕榎野明仁氏 (三河すーぱー絵解き座)



鎧の試着会

〔内容〕甲冑を着て刀を持って、気分は戦国武将！写真撮影もできます。  
〔開催日〕5月5日(金・祝)10:00～15:00  
〔場所〕エントランスホール  
〔料金〕無料  
〔申込〕不要



5月21日(日)は  
無料開館日

国際博物館の日(5月18日)にちなみ常設展観覧料が無料となります。